

哲学と経済学

——経済学の形成過程——

阿 部 弘

目 次

- 1 経済学と哲学
 - 〔1〕：現代と経済学
 - 〔2〕：経済学と哲学
 - 〔3〕：哲学と社会
- 2 哲学の体系と経済学
 - (1) 哲学体系の一環としての経済学
 - 〔1〕：アリストテレス：『政治学』
 - 〔2〕：アダム・スミス
 - 〔3〕：デュゴールド・ステュアート
 - (2) イデオロギーとインディヴィドゥーム
 - 1) 支配学問からの哲学の開放——フランス革命と哲学
 - 〔1〕：イデオロギー
 - 〔2〕：イデオロギー
 - 2) デステュット・ド・トラシーの科学体系
 - 〔1〕：市民
 - 〔2〕：インディヴィドゥームとイデオロギー
 - 〔3〕：デステュット・ド・トラシーの科学体系
- 3 経済学
 - 〔1〕：ド・トラシーの経済学
 - 〔2〕：哲学
 - 〔3〕：その後の哲学と経済学

1 経済学と哲学

〔1〕：現代と経済学

最近、「経済学」に対して様々な問題提起がなされている。特に経済学と哲学の間の関係が問題になっている。一体、「経済学」とは何だろうか。こういうテーマ設定のもとで種々の議論がされている。問題は、経済学は現代には「役に立たない」、とか、大学という、学問次元での「経済学」だから、経済学は、「現代」には通用しないのだ、また、そうだからこそ、実社会（「企業社会」）では経済術こそが本来的なのだ、というようなことが、「経済学」の内外で取り沙汰されていることである。

〔2〕：経済学と哲学

以上のような論議の背景には、経済学と哲学との間の関係の一定の把握がある：つまり、経済学が「理論」とか「哲学」とかいう、とかく「形而上学」的なものをふりまわすからいけないのだ；実学として経済学を措定すれば良い（だから、経済術）、科学としてではなく、技術としては経済学は現実の社会に適合するからだ；等々、アリストテレスが前4世紀に吟味した議論を⁽¹⁾、現在でも蒸し返しているのだ（（ ）は「注」で論文の最後にまとめてある）。

ところで、最近、経済政策は経済術なのだから、哲学は無用であるという論があるので引用しておこう。鳴沢宏英：「ドル全面安——市場の反逆が始まった」〔31〕という、『エコノミスト』に掲載されているものである（〔 〕は文献注で、この論文の末に一覧表で掲げてある）。鳴沢宏英は次のように述べる：「ドル価格」が1987年末に「全面安」の状態になってきた状況に対して、

……今後どういう選択肢がありうるのだろうか。いまアメリカで展開されている議論は大きく分けて二つの系譜になる。

第一の系譜は、そもそも人為的に為替相場を固定したり安定を図る、そのためにG5、G7のごとき国際会議をもつこと自体意味がないばかりか、かえって有害であるという考え方、……放任論……

放任論をさらに分ければ、スプリンケルに代表される純粹マネタリスト的な、あ

哲学と経済学（阿部）

るいはシカゴ学派的な、そもそも人為的な市場介入自体が悪である、という哲学的な反対が一つある。

（「ドル全面安——市場の反逆が始まった」〔31〕51ページ）

この論者は、第一の考え方は社会を混乱させるばかりだ、と論じている。

この論は「哲学」とは一体何か、という疑問を投げかける。一言にして言うなら、「哲学」は、現実に運動している社会、人間を否定するものだ、ということである。哲学が現在の私たちの日常生活など顧みない、無味乾燥な道徳律である、ということの意味している、こんなことを言っているのではない。そうではなくて、哲学などあるから、企業社会、現実に運動している社会はその進む方向を見失ない、危険に曝されるのだ、という、哲学に対する攻撃なのである。

さて、今度はこれとは逆の論をみてみよう。エズラ・ミシヤン『規範的経済学への序説』〔44〕による問題提起である。ミシヤンは言う：

第二次世界戦争以前には経済人（エコノミスト）はどちらかというと哲学者であった。今日では経済人はどちらかというに技術者（テクニシャン）である。

戦争前であればどのばあいでも経済学しか知らない者は立派な経済人とは言えないということは極く普通の見方であった。今日、経済人は、当然のこととして、「経済学だけ」を知っているとしか期待されていない。これまでは、いいわゆる論破された知識というものは、経済の専門家が自分の守備範囲内では自己の知識体系と併存させて発展させることが困難であったような知識であった。増々増大する専門化は、増々狭い観点を生み出す。ありとあらゆる分野で知識が物凄い成長をしているからである。

（『規範的経済学への序説』〔44〕p. XIII）

人間生存の範囲を越えた「知識」の氾濫は、まさに人間に対する反乱に変化してしまった。人間は自分の守備範囲がどこまでなのか、見極めることができないばかりか、その範囲を破壊され続けている。いまや人間が種々の機械体系の部品に変化してきていること、アリストテレス的「物を言う道具」と化して、自然（＝もの）に跪いていることに対する警鐘が鳴っている。

〔3〕：哲学と社会

哲学は元来、プラトンやアリストテレスにみられるように、人間の、人間社会の、すべての問題をカテゴリーとしてきた。だから、たとえばアリストテレスのばあいには、その学問体系は、人間を取りまく自然、その現象を観察することに始まり、人間、人間社会の問題全般を取扱うものとなっていた。

「形而上学」はまさに具体的な自然の考察の後にそれを抽象化することなのであった。だから「形而上学」は具体的な分析を踏まえたものなのであって、ここから具体化がはじまるのではないのである。

アリストテレスは人間を社会的な、政治をする存在として規定し、イエの代表として、各家族の長としてではあったが、これらの人間は相互に平等であること、「王」はその中の第一人者に過ぎぬことを示した（『政治学』〔6〕参照）。その後「ルネッサンス」のなかで再びこの問題が論じられ、人間は本来的に平等であり、それは人間が個々人としては「インディヴィドゥーム」であり、それ自体、動き、活動する動因を内化した完全態にあるからだった。

しかしながら「人間」をこのように規定することは、「人間」を宇宙の中心に置くことになるので、「神」がすべてを決定する中世の封建社会では容れられない存在だった。「神」という絶対的価値による宇宙規定の前には、哲学は具体的な分析を放棄せざるを得なかった。

それ故に哲学が再起するということは、絶対的価値による規定を排除し、人間の世界へと中心点を移動しなければならなかった。人間を中心として、世界を構築するということは、価値規定を相対的なものにした。「神」が定めたはずの人間は、僧侶・貴族・「第三身分」に分けられても、それにも拘らず、共通の性質が区別されずに残った。それは「食べる」ということだった。経済生活がその共通部分として最も基本的な次元を構成していた。

「第三身分」はこの「経済生活」の担い手だった。この身分は聖なるものから観れば、卑しい存在だったのかも知れない（17世紀以前には、フランスでは第三身分を表わす「ブルジョア」は「悪い」、「卑しい」という語と結びつけられていた：（ブルーノ『フランス語の歴史』〔36〕 Vol. 3, p.165）。しかし「第三身分」

はその気になればすべての身分だった。僧侶はここからも出身するし、王だってこの身分に出自を有していることもあった。それとともに、この「第三身分」から、違った層も形成されるようになった。

「第三身分」が「ブルジョアジー」として成立し、政治の支配権を握ってしまうや、やはり、「プロレタリアート」として成立した「第三身分」の他の層と自分たちは同じであるという人間平等論は排除されるようになったし、また「インディヴィドゥーム」の観念も現実を反映しないとして否定され、したがって、この「インディヴィドゥーム」、人間平等論の上に立った「自由」・「競争」・「権利」などといった観念も基本的に否定された。そして、「レッセ・フェール」などという概念もそれが、たとい経済的活動を意味する次元であったとしても、したがって人間の「権利」の領域でなくなったとしても、形骸化してしまったのである。

2 哲学の体系と経済学

（1） 哲学体系の一環としての経済学

〔1〕：アリストテレス：『政治学』

アリストテレスが「人間」を規定した際に、第一に、人間は「手」を持ち、自然に対して働きかけ、自然の他に、この手の働きかけによって生ずる、つまり技術の結果である「もの」を造りだしたこと（『靈魂論』〔4〕など参照）、第二に、人間は社会的存在であり、国を成して共同の生活をしていること（『政治学』〔6〕／『ニコマコス倫理学』〔5〕）、を挙げた。

しかし、アリストテレスのばあいには、「人間」規定の第一の要因は、実際の生産的労働が、「人間」から排除されていた「奴隷」によってなされていたこと、当時のアテネ・ポリスの経済が商業中心であったこと、から、第二の要因と結合せず、したがって、学としての「経済学」は哲学体系上の日程には登らなかった。それは「政治学」として、第二の要因を扱うものとして体系化された。

〔2〕：アダム・スミス

アリストテレスが試みた問題は18世紀後半から19世紀前半にかけてイギリス、フランスで再び登場する。

アダム・スミスは1759年の『道徳感情論』〔23〕の中で、「道徳哲学における二つの有用な部門は倫理学と法学とである」として、社会科学を哲学体系の一環として展開することを示唆した。（『道徳感情論』〔23〕 p. 340／（下）735ページ）。スミスは最初（『諸国民の富』以前）は「法学」の体系上で、現在、わたしたちの眼前にあるスミスの「経済学」（＝『諸国民の富』）に盛り込まれている内容を展開する予定であった。このばあい、「法学」体系中（正義、行政〔政治〕、国家収入、軍備）“Police”と呼ばれる『法学講義』第2部の中で「経済学」に相当する部分が展開されていた⁽¹⁾。この部分が法学体系から独立して『諸国民の富の性質とその原因に関する研究』〔25〕として1776年に発表されたのであった⁽²⁾。とはいえ、スミスは、「道徳哲学」の体系は示したが、しかし、この体系上の「法学」と「経済学」との関係については明確な体系としては示さなかった⁽³⁾。

〔3〕：デュゴールド・ステュアート

アダム・スミスが哲学体系の一環として経済学を展開する意図がありながら、それを果たさず、むしろ分離して『諸国民の富』〔25〕として経済学を発表したのは、スミスの哲学が、スコットランド常識哲学を根本に有していたからだとするならば⁽⁴⁾、同じスコットランド系に属するデュゴールド・ステュアートのばあいはどうであったか。

ステュアートもまた、社会科学を位置づけた哲学の体系を胸に抱いていた。

ステュアートは1792年に『人間精神の哲学』〔20〕を刊行する。この著作は彼の死（1828年）の直前つまり1827年に第3巻が出版され、遂に未完に終わったものである。ステュアートの全体構想は次の通りであった：

「人間精神の哲学」

1. 知的能力の分析
2. 行動するもの、道徳的存在の観点から考察した人間

哲学と経済学（阿部）

3. 政治社会を構成するものという観点から考察した人間 （『人間精神の哲学』〔20〕 Vol. I 「まえがき」より）

この計画は第1巻で〈1 知的能力の分析〉、第2-3巻で〈2〉のテーマを展開したに留まった。では〈3〉のテーマはどのようにになったのか。これについては『経済学講義』〔21〕という形で、ステュアートの死後1855年にウィリアム・ハミルトンの編纂で出版された。2巻本の大著であった。

この『経済学講義』という2巻本はステュアートの「人間精神の哲学」の体系上の産物かというに、必ずしもそのようにはなっていない。全体は二つの部分に分かれている：

- I 道徳哲学概論
第3部一（附録）
政治体の構成員としての観点から考察した人間
- II 経済学講義
（〔21〕〈内容目次〉参照）

ステュアートは1793年に『道徳哲学概論』という1冊本を刊行している。1792年に『人間精神の哲学』第1巻の「まえがき」で予告した体系の〈3〉は『経済学講義』の一部としてハミルトンの手で挿入され、それは、恐らくはステュアート自身の手になると思われるが、『道徳哲学概論』の第3部の「附録」として、最初の形態から変更されて、上記にみるように組込まれたのであった。内容は、「政治社会の歴史」と「立法および政府の一般的原理」であり、初期のアダム・スミスと同様に「道徳哲学」として国家論を展開しようとしたのである。これと「経済学」はどのように関わるのだろうか。

ステュアートの「経済学」の構成は次のようになっている：

- 序説：経済学の対象と範囲について
- 第1部：経済学固有の問題について
 - 第1編：人口について
 - 第2編：国富について
 - 第3編：貧困について
 - 第4編：下層階級の教育について

第2部：政治学固有の問題，または政府の理論について

第1章：政府の簡単な形態について

第2章：混合した政府について

(〔21〕 <内容目次>参照)

以上の構成から明らかなように、ステュアートのばあいは、ハミルトンが「経済学講義」というタイトルをつけたにも拘らず、その内容は、アダム・スミスの「道徳哲学」体系としての「法学」に相当するにすぎない。これが、アリストテレスの「政治学」の体系かどうか⁽⁵⁾、議論は稿を改めてする。

(2) イデオロギーとインディヴィドゥーム

1) 支配学問からの哲学の開放——フランス革命と哲学

〔1〕：イデオログ

ステュアートは「哲学」体系として、「道徳哲学」と「社会科学」の統一をすることには失敗した。というよりは、ハミルトンの編纂した『経済学講義』〔21〕の体系を見る限りは、未だ、「道徳哲学」それ自体でしかなかったと言える。しかしながら、アダム・スミスのもたらした影響は大きく、それが、ステュアートの体系に「経済学」を本格的に持込んだと考えられるし、なによりも、彼は大学で近隣諸国併せて、1800年に唯一の経済学の講座を設けたことに現われた⁽⁶⁾。

ここで見落してはならない重要なことは、ステュアートは「著作」からみる限り、「一人の学究のまことに典型的な担々たる一生」を過ごしたかにみえる(福鎌忠恕〔35〕341ページ)が、彼の『人間精神の哲学』〔20〕ではすでに、人間は市民として、政治的でなければならない、とし、フランスの哲学者の態度を評価している(〔20〕Vol. I. chap. IV: §. VIII参照)。実は、ここで述べる彼は「イデオログ」の一員であった。この問題でステュアートは政界から攻撃を受けた(福鎌忠恕〔35〕356ページ)。

さて、この「イデオログ」(*Les Idéologues*)であるが、一般にはカール・マンハイムが『イデオロギーとユートピア』〔43〕の中で述べたように、そし

て最近ではマイケル・ビーリッヒが『イデオロギーと社会心理学』〔34〕で述べているように、「心理学」的に科学を構築しようとしていた学問集団であると見做されている⁽⁷⁾。

ピカヴェエの資料を使いながら、上山春平：「哲学思想」〔7〕が整理しているところによれば、「イデオログ」としてまとめることの可能な人物の数は90名を超え、年代も1879年：フランス革命の時点で40歳以下が全体の95%を数えるものの、1806年生まれのJ. S. ミルや、さらには1839年生まれのテオドル・リボーまで含まれ、相当長期に亘って活動していたグループであることが判明する。しかも、主義・主張では後程触れるように、このグループの代表者の一人と考えられているデステュット・ド・トラシーの理論体系を真向うから攻撃しているサン＝シモンや、オーギュスト・コントなども一括されて挙げられているし、また、シエイエス、アンドレア・シエニエ等々、多種多様な活動範囲を含んでいること、を考えると（上山春平「哲学思想」〔7〕237～246ページ参照）、エメット・ケネディが『革命期の或る哲学者』〔16〕の中で考察しているように、道徳と政治とを、学問的な科学としてのみならず、実際の生活の場（教育や政治）においても統一的に構築しようとしていた、フランス革命期を中心とした政策集団と見ることができ⁽⁸⁾。その基本となったのがコンディヤック、さらにジョン・ロックに端を発する「感覚」機能を中心とした考え方であった。

〔2〕：イデオロギー

「フランス革命」の最中に、とは言うものの「テルミドールの反動」の後ではあるが、前述の「イデオログ」学派によって、「イデオロギー」という概念が打ち立てられた。この概念は、現在わたしたちが日常普段に用いている「イデオロギー」という言葉の語源である⁽⁹⁾。しかし、元来はこの概念は、人間が、「神」などの絶対的価値に囚われることなく、自由に、「人間」を基本にしてあれこれ宇宙を組み立てようとする考え方であり、哲学であった。

この哲学の提起はデステュット・ド・トラシーが1796年に行ない、1801年

には『イデオロギー論』〔29〕として刊行された。このイデオロギーに関する著作は1801年に第1巻、1803年に第2巻、1805年に第3巻が刊行された。タイトルは次のようであった：

- 第1巻：厳密な意味でのイデオロギー
- 第2巻：文法学
- 第3巻：論理学

第1巻から第3巻までが、「イデオロギー論」第一部として、人間の知覚手段の形成に関する段階的発展に関する研究であった。これに対して、第二部：知覚手段を人間の意志とその結果へ応用する問題として、経済学及び道徳（未完）が1815年に発表された。これはそもそも未完であったこともあるが、この段階で、「イデオロギー論」の体系はストップしてしまった⁽¹⁰⁾。

「イデオロギー論」の出発点は、「考えるということは何か」であり、そこから「観念」(=*idée*)、そのシステムが提起された。ド・トラシーはまず、この“*idée*”の語義を問題にする。“*idée*”はその起源を古代ギリシア語の“*eidos*”と同じものに持つ。この「エイドス」は“*image*”を意味するものであり、感覚することにより、知覚を媒介することによって、ある一つの像として結果する。観念、である。この「観念」の有機的なシステムが「思考」になるのであるから、「観念」のシステム、すなわち“*idée+logos*”こそが“*ideologie*”となる⁽¹¹⁾。

古来、哲学は「見る」ということを常に問題にし、そして、そこから、つまり種々「見た」結果から、それらを綜括して、普遍的な何ものかを探りだし、人間の行動の指針とし、生活の基盤に組み入れてきた。

アリストテレスは「見る」ということから、それを具体的なものから秩序あるもの、「理論」に抽象した(『形而上学』〔3〕)。人間に関しては、個々に存在しているものをやはり抽象し、「ポリス的人間・社会」を設定した(『政治学』〔6〕)。「社会」は具体的な人間の体系として考えられたのであった。「社会的人間」は同時に「共同的人間」であった(『ニコマコス倫理学』〔5〕)

ド・トラシーは、アリストテレスの「理論」を「イデー」の体系とし、

「イデオロギー」を設定したのであった。

「見る」という、人間の、眼をさましてまず行なう動きから、人間社会を、人間を取り巻く環境・自然を、社会を、考察するということについては、次のように説明できる。「見る」という行動は、視覚・聴覚、その他の感覚器官を通じて（手・足・体全体も入る）大脳の中で時間経過の後に一定の抽象化がなされる。この抽象化の結果、わたしたちは、そこに何があるのか、それと自分との関係を認識するのである。したがって、「見る」ことの結果が対象化したものが、「観念」として、わたしたちの認識そのものなのである。

このばあい、アリストテレスが『靈魂論』〔4〕の中で考察したように、“τὸ ὄν”（「在るもの」）は種々雑多であるし、しかも刻々変化している（アリストテレスのばあいは、「時間」は無視されているようであるが）。一口に「見る」と言っても「何を」みるのか、が問題になってくる。であるならば、「共同」としての人間は、「見る」もやはり「共同」でなくてはならない。そこに成立する「観念」は普遍的性格をもつ。

であれば、ここに成立する「観念」は一般的なものであり、固定化されたようにみえる。しかし、「私」が見ようが、「他者」が見ようが、現実とその対象となっている「もの」は、それ自体、刻々と「変化している」のであり、それ自体としてはそこに成立した「観念」は役に立たない。また、見る主体もまた変化体であれば、「観念」もまた変化態にある。

このようなものとしての「観念」とその「観念」の形成者、「観念」の土台となったもの、それぞれが変化せざるを得ないのであるが、「観念」それ自体は運動としては他の二者に遅れる。ここにフランシス・ベーコンが提起した、偏見化した観念とそれによる他の二者の束縛の問題がでてくる。

しかし、ベーコンは「観念」を二つに区別した。

人間的精神の「イドラ」(*idola*)と神的精神のイデア (*idea*)〔観念〕との間、すなわち空虚な臆念と、見出されるがままに、被造物に付せられた真なる刻印およびしとの間には、或る少なからぬ距りがある。

（『ノブム・オルガヌム』〔37〕77ページ）

そして、人間が主観を通じてものごとを推測するのは、この「イドラ」的な、不十分な、しかも、偏見に満ちた観念を媒介にしている以上、真なるものではありえない、としたのである。

「イドラ」を偏見として、これによって観念化するのではなく、「アイデア」、すなわち、神の叡知化したもの、つまり、現実中存在し、運動（変化）している事物に対して、人間が、自ら対象物との交渉をもつことによって、伝統・因習に囚われることなく、その経験を正しく把握することが求められているのである。

そのためには、唯単に、事物の描写等〔＝イドラ〕をするだけではなく、事物の成り立ち〔＝アイデア〕を、つまり、アリストテレスが最後まで回避し続けた「技術」的なもの、事物の構造分析をすることによって真理に到達できるのだ、これが、ベイコンの言わんとしたことであった（『ノブム・オルガヌム』〔37〕77—78, 82, 157～160ページ、参照）。

ド・トラシーはこのようなベイコンの展開した「アイデア」論を基盤として科学論の出発をしたのであった。「イデオロギー」のもつこの様な意味合いを無視して、マンハイムが、「イデオロギー」の起源としてベイコンの「イドラ」論をもちだした（『イデオロギーとユートピア』〔43〕S.24; 28ページ）のとは異なり、ド・トラシーは、まさにこの“*idola*” それ自体がそもそもギリシヤ的“*εἶδος*”なのであって⁽¹²⁾、そのばあいの基礎となる“*εἶδω*”からくる“*idea*”（観念）は人間から離れては存在し得ないこと、「神」という架空の、しかも人間性の発露を妨げるものを排除して、この言葉本来の意義から「アイデア」を人間の問題とすることによって、私たち人間の生活の仕組を明らかにしようとしたのである。

2) デステュット・ド・トラシーの科学体系

〔1〕：市民

「イデオロギー」はフランス革命が産みだした。それは、「人間」の上にへばり着いていた一切の「権威」とか「身分」とかいう衣服を剥取ろうとした。

さらに、この革命は、これらの勲章を外しただけではない、具体的な人間の存在、貧富・支配とかいうものを一切隠蔽して、「人間は個人として、「神」のまえではすべて平等である」という外部から人間に貼り付けられたものを剥がしてしまった。

以上の作業は18世紀半ば頃から、思想の仕事としても試みられてきた。エルヴェシウスは『人間論』〔9〕で、「神」の名で一体何が行なわれてきたのかを曝露した。そのために、彼は宗教界・政界から攻撃を受け、止むを得ず、自分の言を取り消さざるを得なかった。彼は生きて行く術を、「貴族」の外には見つけられなかったから（根岸国孝「エルヴェシウスの生涯」〔32〕参照）。

決定打はフランス革命に持ち越れた。フランス革命当時の1789年初頭に、シェイエスは僧侶の身ながら（だから、「第一身分」）、身分制度の末端に位置した「第三身分」こそが「国民全体」なのであり、すべての社会的な労働は「第三身分」によってまかなわれている、と『第三身分とは何か』〔17〕の中で述べた。

皆が「第三身分」になろうとした。「労働をする者こそが「市民＝シトワイヤン（*Citoyens*）」であると見做された⁽¹³⁾。フランス革命のモットーになった。

イデオログであるカバニスが指導して作成したフランス革命時の語彙集『革命についての語彙』〔1〕には“*CITOYEN*”が当時の合言葉として採録されている。同時に“*CIVIQUE*”, “*CIVISME*”等の言葉もこの語彙集では際立っている。そして“*CITOYEN*”は“*CIVIQUE*”, “*CIVISME*”的なものでなければならなかった。

「シトワイヤン」という昔ながらの、ローマ以来の響きの良い言葉は、実はフランス革命時のフランスの社会では変化していた。この言葉は“*CITOYEN ACTIF*”を意味していた。そのなかみは“*CIVISME*”であり、これはシトワイヤンに生命（活気）を与え、その資格を個々人に付与する代りに、義務を熱心に果たすことを宣言する熱狂さ、を意味した。対立的なのは“*INCIVIQUE*”, “*INCIVISME*”であった。“*INCIVIQUE*”: *CIVISME*

を失うことによって罪を犯すこと、また“*INCIVISME*”：*CIVISME*の欠落した；良い市民の感情や行動に対立する。これらの言葉が、やはりフランス革命時に創られた“*GUILLOTINE*”・“*GUILLOTINÉ*”・“*GUILLOTINER*”等という言葉とともに流行したことを、この語彙集は示している。

当時の典型的「市民」が残した『日記』〔13〕をみると、まず、特徴的なのはこの『日記』が、さきほどの“*GUILLOTINE*”，“*INCIVIQUE*”，つまり殺された人間の記録を残していることであるが、そのばあい、注目されるのは処刑された人間はその身分が、社会的役割がどのようであろうとすべて「悪人」だから、という形容をされていることである。

それこそ「革命の恩恵にあずかったとみなされている第三身分の一部に属していた」が故に（オベール：『『日記』〔13〕「はしがき」〔10〕），まさに、淳朴な定期的に警備の任務につくことを通じて「革命に参加していること=*CITOYEN ACTIF*」であり，“*CIVISME*”なのであった。

革命政府のすることがすべてであって、昨日は、この「政府」の最高指導者であった者（たとえば、ロベスピエール）でも、今日、政争に破れて逮捕されれば、彼はすなわち「悪人」なのであった（『日記』〔13〕246～251ページ）。

ここで取り沙汰されている「市民」は「シトワイヤン」である。別に“*CITOYEN ACTIF*”かどうか限定詞など不用である。これ以外のカテゴリーはこの場にはあり得ない。だから「ブルジョア⁽¹⁴⁾」ではない。そもそも“*citoyen*”という概念は「住民」を指すものであって、意味するところは、個々人の集団、から来た、普通の意味での「人」である（社会的意味で⁽¹⁵⁾）。

しかし、この“*citoyen*”はローマ時代に洗礼を受けた“*civis*”．“*civitas*”として、「権利」をもったものという意味で用いられるようになったのである⁽¹⁶⁾。だから、貴族も、僧侶も、そして、「平民」もすべてが“*citoyen*”だったのである。そこに、フランス革命時における“*CITOYEN ACTIF*”の意味がでてくるのである。しかし、すべての人間が“*CITOYEN*”であろうとするのは自由だが、逆に“*CITOYEN*”から人間に付着している様々な勲章・肩書きを見れば、問題は別になってくる。

〔2〕：インディヴィドゥームとイデオロジー

デステュット・ド・トラシーが「イデオロジー」の問題を提起している次元は、「市民」（シトワイヤンだろうが、その他であろうが）レベルではなくて、「インディヴィドゥーム」レベルである。彼の理論展開上に「シトワイヤン」は登場するが、それは一般的呼称としてであって、シュイエスの意味でもない。フランス革命時の、“ACTIF”かどうかというような限定詞のない、“CITOYEN, ENNE”に過ぎない。

ド・トラシー自身も“CITOYEN”になることを欲していたとは言える。というのは、人間の平等ということの問題にする限り、自分の肩書きである「第二身分」という、貴族身分を捨てることが前提であった⁽¹⁷⁾。

さて、ド・トラシーは以上のように考えることは考えたが、生涯、やはり「貴族」であった。というのも、フランス革命時の「市民」というのは、シュイエスがいみじくも述べたように、「国民」のことを指したのであり、身分制度の払拭がそのテーマではなかったのである。そこには、ローマ以来の“*civitas=citoyen*”という現実があり、*civisme*（=愛国心）が問題だったのである。

であるなら、ド・トラシー的、貴族は、人間を問題にするとすれば、このような社会的肩書きをもった「市民」などという次元では物事を正確に把握することにはならなくなってしまふ（*idola* は *citoyen* 的現実の反映だから）。人間それ自体を問題にすべきである。思惟するのは肩書きではない。「人間」としてである。であれば、「インディヴィドゥーム」（=*Individuum*）でしかない。かくして、ド・トラシーの「イデオロジー論」は「インディヴィドゥーム」的次元で展開されるのであった。

〔3〕：デステュット・ド・トラシーの科学体系

ド・トラシーの科学体系は次のような構成をとる：

Elements d'Idéologie の体系

I 私たちの知覚手段の歴史

(1) 私たちの観念の形成、あるいは、厳密な意味でのイデオロジー、に関して

- (2) 私たちの観念の表現, あるいは, 文法, に関して
 - (3) 私たちの観念の結合, あるいは, 論理学, に関して
 - II 私たちの知覚手段を私たちの意志やその結果の研究へ応用することについて
 - (1) 私たちの活動, あるいは, 経済に関して
 - (2) 私たちの感覚, あるいは, 道徳に関して
 - (3) 上記二つのものの指揮, あるいは, 政府, に関して:〔宗教観念, 社会組織, 青年教育〕
 - III 私たちの知覚手段を私たち以外の物の研究に応用することについて
 - (1) 物体とその特性, あるいは, 物理学, に関して
 - (2) 範囲の特性, あるいは, 幾何学, に関して
 - (3) 量の特性, あるいは, 計算, に関して
- (『イデオロギー論』〔29〕第3巻「論理学」pp.520—521／第5巻「道徳論」の「最後のハート」pp.573～574)

ここに見るように, ド・トラシーのばあいには, 私たち人間が生活することを「見る」そして「考え」, 「意志」を形成し, そして現実の生活として実行する, という形で規定する。ここでの基本は「精神的機能」である⁽¹⁸⁾。

ド・トラシーが人間社会を分析していくばあい, その基本を抽象的人間, そして, この抽象的人間が「考え」・「行動」して行くのであるから, 現実の生活が基盤とはなり得ない。人間は「インディヴィドゥーム」として, その精神的機能の発揮を通じて生活して行く。

このようにド・トラシーは人間社会を分析していくばあい, 基本的に人間を抽象的人間, したがって「インディヴィドゥーム」として, その考察の出発点に置いた。なぜなら, 人間社会を構成しているのは一人一人の人間としての個人であり, この「個人」(=インディヴィドゥーム)が, 考え, 判断し, 行動して, できあがっているのが現実の社会であるから。

だから「インディヴィドゥーム」としての人間の分析が科学の出発点になる(アリストテレスのように)。自由に考え, それを観念化して行動のための判断基準にしていく, そこに「イデオロギー」という観念の「体系」が構築された。

この体系はまず, 人間が外界を感覚することをその基本として措定した。

このばあいには重要なことは、人間が主観的に「感じる」ということではなくて、人間を構成している感覚器官が外界を正確に「感じる」のであり、したがって、これら感覚器官の複合体として人間が構成されるのであり、人間の存在は、感覚器官の行動の結果としてあることになるのであった。

以上の過程は実は複雑に展開する。「観念」の体系は「外部感覚」と「内部感覚」に対する「意志」の働きによって実在的なものになる。「感覚」する主体は「判断」・「意志」主体である。この判断したり意志したりする主体＝「私」は、同時に、その結果として行動するわけであるが、その際に、この感覚「主体」は自己の外的な存在を知覚し、このことが内的存在からの結果に対する抵抗となる。この意志の働きかけの「手段」が「知覚手段」であり、この「手段」が、自己の存在を他者との関係において形成されることが、自己の社会的存在の基盤となる（ド・トラシー：『イデオロギー論』〔29〕第1巻pp. 137～138, 402／また、上山春平：「哲学思想」〔7〕264～265ページ、参照）。

このようにして、私たちが外界から何かを感じとることが、内的な感覚によって形成されてきた、いわば、何の外からの刺激もなく形成されてきたものに対して刺激を与え、そのことによって生命、生活が始まる。だから、ド・トラシーは次のように書いた：

感覚は、私たちが生命（生活）と呼んでいる現象の最終目的であり、私たちの知的能力を構成しているものの最初のものである。かくして、この知的なものである道徳は、別の観点から考察した、物理学に過ぎないのである。

（カバニス『人間の身体と道徳の関係』〔11〕に対するド・トラシーの執筆になる「分析表」p. 4, Eng., Vol. II, p. 692）

だから、外部世界での生活は（例えば道徳、経済、法、etc.）、感覚主体による主観的行動にはなり得ない。このことによって、ド・トラシーの「イデオロギー」第1部の世界を、第2部の世界がひっくり返してしまうことになるのだが、これは次の章の課題となる。

3 経済学

〔1〕：ド・トラシーの経済学

「イデオロギー論」第二部は、経済学から展開される。この第二部は「意志とその結果に対する知覚手段の応用」が課題である。前述したように、これは、「経済」、「道徳」そして「政治」で構成される。この構成はド・トラシーと同じに「イデオロギー」であったデュゴールド・ステュアートの体系、「道徳」、「法=政治」、そしてこの「法」の中の「経済」とは質的に異なったものとなっている。むしろ、アダム・スミスの体系との類似点がでてくる。ド・トラシーの経済学の詳細については稿を改めて論ずる。

さて、ド・トラシーの「経済学」であるが、これはアメリカでトーマス・ジェファソンの手で、著者の了解のもとに *A Treatise on Political Economy* として、1817年に出版され、1823年にはフランスで、したがって、ド・トラシー自ら『経済学』として出版したほどであるにも拘らず、1815年に出版した時点（タイトルは『意志およびその結果に関する論』で、第4・5巻合本）でも、また1818年版においても、「知的能力論の第二部でしかない」と力説している（『イデオロギー論』〔29〕第4巻、p.285）。

しかし、にも拘らず、この「経済に関する論」はやはり「経済学」であった。久保田明光もこの点を強調して、「著者がその名称を好むと好まざるとに拘らず、その「序説」と第一部は……彼の経済理論を示したものにちがいない」と言う（「ドステュット・ド・トラシーの「観念学要論」にあらわれたる価値理論」〔15〕134ページ）。

さて、ド・トラシーがあくまでも「知的能力論」として位置づけた「経済学」も、それはそれで、内的に形成された彼の経済理論が外的世界の存在に我が身を置き、ずたずたにされる様を自ら示している点で興味深い。

ド・トラシーは、私たちが「意志」をもった結果「所有」を生じると言うのであるが、そしてそのことによって、私たちの全生活が規定されると言う

のであった。しかし、その結果としての現実社会の「所有」は彼が意図した牧歌的な人間平等論を吹き飛ばしてしまった。彼が設定した抽象的人間と現実的人間、抽象的な社会と現実の社会との間の違いはあまりにも大きかった。

一方では、「人間」にそくして、わたしたち自身の「意志」を主体にして社会を考察しようとしたのに、他方では、現実はこの「人間」をやはり受け付けようとはしなかった。「シトワイヤン」も、ド・トラシー自ら参加して成功させようとしていた「フランス革命」の中で変質したし、この「国民」全体であるはずの「シトワイヤン」も分裂期に入っていたのである。

ド・トラシーは、社会を分析するにさいして、次のように述べた：

私は……社会を道徳的關係という視点では考察しない……私は社会状態を経済的關係のもとでのみ、つまり、私たちのまさに直接的な欲求および、それを満足し得る手段に関して考察するであろう」

（『イデオロギー論』〔29〕第4巻，p.143；Eng., pp.5-6）。

このようにして出発したド・トラシーではあった。「意志」が「所有」を産みだし、したがってすべての人々は何らかの所有者であって、これらの人々の「所有物」の交換過程の連続した運動として、社会が、経済社会があり、この交換を通じて契約当事者はお互いが利益を得る仕組みになっている、このようにド・トラシーは考えた（『イデオロギー論』〔29〕第4巻，p.144；Eng., p.6）。

しかしである！ 現実に目を転じると、労働という所有物を売ることによって、この交換の一方を担っている労働者（雇われる者）は極めて不利な条件に立たされていることが判明した。

こうして彼の分析は、人間の「意志」が現実には自由な形では実現されていないような状態をも明らかにしてしまった。彼は、お互い「所有者」だった者が、「持てる者」と「持たざる者」へと分裂行進して行くさまを予言した。だから、マルクスは『資本論』第1巻〔41〕の中で次のように書いた：

「デステュット・ド・トラシーは次のように宣告する：『貧しい国々では人々は安楽に生活しているが、豊かな国々では、彼らは概して貧しいのである』」（1867 Aufl., S.635；1872 Aufl. S.674）

マルクスはフランス人のためには、このド・トラシーのもつブルジョア的冷剛さを明確にするために：「魚のように冷血なブルジョア理論家」とド・トラシーを形容し、彼が「無情にも」このようなことを自国の人々に対して言っているにつけ加えた（フランス語版 p. 286 参照）。（なお English ed., 4-te Aufl., 日本版はフランス語版に同じ、また、ド・トラシーの文章は『イデオロギー論』〔29〕第4巻, p. 361; Eng., p. 163）

〔2〕：哲学

さて、これまで、「市民」は「シトワイヤン」カテゴリーのみとして「ブルジョア」については扱ってこなかった。それはそれで十分であった。「市民」一般レベルで出発した、ド・トラシーの理論は、結果としては、「市民」一般という形でまとまりはしなかった。前に引用したマルクスの「ド・トラシーの言」の箇所、ド・トラシーは、この世の中、大昔に、パラダイスがあったとは聞くが、それも続かなかった。繁栄しているものがあれば、残余はみじめなのだ。しかし、「貧しい人々の利害というのは、社会の利害と一致するのだ」と述べて、ひとまずは落ち着くのである（『イデオロギー論』〔29〕第4巻, pp. 560~561; Eng., pp. 163~164）。

ここから「シトワイヤン」の世界、つまり「市民一般」から「ブルジョア」の世界へと橋渡しがなされる。勃興してきていたブルジョワジーは自ら「シトワイヤン」として、シェイエスに言われるまでもなく、自己の使命に忠実であった。イデオログであった J. B. セイは、雑誌の編集をしばらくやり、政治活動をした後に (*La Decade*)、周知の『経済学』を発表し (1803年)、学者として生活したが、ナポレオンの『経済学』に対する修正要求を拒み、出身が「第三身分」としての商人であったこともあり、パリの郊外に綿糸紡績工場を設立して、400人からなる労働者（しかし、「婦人と子供」）を雇い入れ、ブルジョアとしても身をたてたのである。だから、セイは自ら、「理論と実践との最前線で先頭にたっていた」と言うのであり、それは、ブルジョアとして、フランス革命の精神を貫徹し得たことを意味するのである（セイ：『経済学』〔26〕第3版 (1817)「序文」；また、増井幸雄：「セイの生涯」〔39〕参照⁽²⁾）。

哲学と経済学（阿部）

ド・トラシーは、セイと同じ「イデオログ」だったとしても、その立場が異なっていたのは、むしろ当然であった。ジロンド党的「イデオロギー」の無意味さに落胆し、また“INCIVIQUE”でロベスピエールに獄にたたき込まれ、しかし、ロベスピエールの失脚が近いと信じ、獄中で新らしい『イデオロギー論』の準備をし、自分の処刑日の2日前にロベスピエールが失脚し、自由の身となり、ナポレオンをかつぎ出して皇帝位に着かせた、その途端に、ナポレオンに邪魔物扱いをされる。

数奇な運命だと言えそうだが、しかし、とにかく、ナポレオンはド・トラシーから『イデオロギー論』講義の機会は取り上げたが（ド・トラシーは「中央学校」で講義をしていた）、貴族としての議席は認めていたのだから、ド・トラシーは貴族として生活ができたのであった。

しかし、1805年に『イデオロギー論』第一部を書きあげたところで精魂尽き果て、ナポレオンを追放した後、やっと、1815年に、その第二部に着手するが、「中央学校」でも「イデオログ」の影響は薄れ、最早「第二部」を仕上げる気持は無くなった（人は、カバニスの死……1808年、妻の死……1815の直前、これらを直接因だと言う）。

このようなド・トラシーではあったが、わたしたちは、彼が途中で挫折したとは言え、哲学の体系として社会科学の位置づけを行なっていることは認めるところである。或る意味では、「貴族」としての実践哲学であったと考えることができる。ここではド・トラシーの学問体系について突込んで考察したわけではない、ましてや「経済学」については角を通っただけである。だから久保田明光が次のように言うときは、次回のテーマだと思わざるを得ないが、ド・トラシーの一見「主観」的に思える体系がやはり、一味違った形で残るのもこの実践的哲学の所以であると思う。

久保田明光は次のように述べる：

感覚論的哲学者ドステュット・ド・トラシィの経済理論、……彼の価値理論の理解に必要な限りふれたその経済理論から、われわれが知り得たところは、先ずこの感覚論的哲学者の経済理論の中に、スミスの伝統、セイの流れを見出すところが尠くないにも拘らず、例えばコンディヤックに見うる様な所謂主観理論の萌芽の一

つだにも見出し得ないという事である」

(「ドステュット・ド・トラシーの『観念学要論』にあらわれたる価値理論」〔15〕
150～151ページ)

ド・トラシーの理論は、初期のフランス革命には受け入れられ、「王権神授説」を「皇帝」位によって復活しようとしていたナポレオンには疎まれ、そして、人間の絶対的平等論を説くサン・シモン派からは攻撃を受けた。「フランス革命」が抽象的人間平等による「自由・平等・友愛」の精神のもと、「市民」の名のもとでの人間による人間の支配体系(私的所有)を内化していた性格をよく表わしているといえよう。サン＝シモン派は機関誌『グローブ』で、イデオログ、とくに、ド・トラシーの『イデオロギー論』と『モンテスキューの「法の精神」に関するコメンタール』〔30〕を集中的に攻撃した。後者は特に、実践の場で当時の「議会」政治に受け入れられていたから、それに対する攻撃も一段と激しかったのである(ウエルチ:『自由と効用』〔8〕pp. 166～167参照)。

〔3〕: その後の哲学と経済学

ド・トラシーは『イデオロギー論』という形で、失敗に終わったとはいえ、1801～1815という長い年月をかけて、哲学の体系を構築しようとした。この体系は「経済学」を含むものであった。

他方、同じ「イデオログ」としてのデュゴールド・ステュアートは、イギリスの経験から、やはり哲学の体系づくりをやっていて、明確ではなかったが「経済学」をも位置づけようとしていた。彼は1792～1827まで、この体系の構築を試み、物理的に生命を尽きさせてしまった。ところが、ステュアートの死(1828)後、1855年にハミルトンが刊行したステュアートの『経済学講義』はステュアートが1792年の段階で予定していたものとは異なっていた。したがってそのつながりが不明であった。

ステュアート体系とド・トラシー体系の違いについては既に考察してきた。ステュアートは道徳の一環として経済学を考えていて、政治をもその体系と

して考えていたのに対して、ド・トラシーは、政治を以って経済と道徳を綜括し得ると考えた。イギリスの貴族主義的な社会体制と、政治革命でそれが崩壊したフランスの違いであった。

さて、その後は、「経済学」とは何か、これを、やはり「イデオログ」と見做されている J. S. ミルが取り組む。ミルは1836年に「経済学の定義について、およびそのための固有な研究方法について」〔45〕という論文を発表する。この中で、ミルは、経済学は、イギリスの伝統を受けて、道徳科学である、と言う。彼は、この科学は「人間の便益と享楽とに貢献する諸々の対象」を自己の研究対象として扱うのであるが、その場合、「経済学」は「科学」であるからして、事柄を抽象的に扱わざるを得ない。具体的なもの（政策）は科学とは異なって技術（Art）でしかない。ここに「推論」としての「科学」と実践としての「技術」を分けてしまった。「推論」は攪乱的原因を排除できない。だから、二種類の哲学が形成され、一方は「思弁的」（speculative）なものであり、他方は「実践的」（practical）なものである（〔45〕 pp. 151～153, 202～204ページ参照）。これを一体系として完成させたのは例外的でしかない、として、フランスのテュルゴーを挙げている（〔45〕 p. 151, 201～202ページ）。

このようにして、以後は、「経済学」は思弁的なものになって行ってしまふ。「推論」であるから、実際には当てはまらない。この様なことは、現実をみる眼を曇らせ、「人間」の現実には眼を閉じて置くという結果になる。マルクスの「経済学批判」はまさに、このような「科学」に対する批判であった。

現在、「経済学」に対して「危機」が叫ばれているとき、やはり、このミルが提起した問題について再度立ち帰る必要があるのではないか。現代の「経済学批判」が要請されるが、ここでは、この問題に対して、現代からの接近を試みているハチソン『政治学と経済学』〔33〕の問題提起を引用して、次の課題にたいする序としておこう。

ハチソンは言う：

100年ほど前から“Political Economy”は“Economics”になった。このことは経済学と政治学の相互結合や相互依存が、十分に論議の余地があるところだとはいえ、恒常時に、根本的に重要な問題となってきている時点で起こったのである。その時代には政府の経済上の役割は、今日と比較して極めて小さいものであって、やっとその役割の長い・巨大な拡張が始まったばかりであった。経済の政治的・社会的枠組は比較的安定していた。この期間、経済学者が理論上や政治上で、いわゆる“microeconomics”と呼ばれることになっていた問題に、つまり政治的および社会的秩序に対してはほとんど影響を及ぼさないと仮定することで十分であるような、そのような過程や政策の問題に焦点を当てていたのは当然であった。

今日では、政府の役割が拡張してきたので、様相は極めて異なったものになってきている。政治的および社会的秩序が、「与えられたもの」とか、安定している、などということとはほど遠い状態にある。「マクロ」政策・理論が経済分析を支配している。経済学と政治学との間の相互の結びつきや相互依存は増々重要になりそして複雑になってきている。しかしながら、〔経済学の〕テーマはいまだに、いわゆる「エコノミクス」なのである。そして、テキスト・ブックやアカデミックなどところでは、〔経済学は〕「政治学」から切り離されたものとして説明されている。それどころではない。この高度に特殊化された社会にありながら、ヒューム／スミス／ミル／シジウィックといった、過去の時代の巨匠たちがとったのと同じような方法で経済学の処方箋を政治学の理論やその実行過程に結合してくれる人物を期待するというのは、よほどどうかしている。」

(〔33〕「まえがき」, p. vi)

〔注〕

1 経済学と哲学

(1) 「学」と「術」

アリストテレスは『政治学』〔6〕において、単なる方法としての「術」と、体系だった知識としての「学」とを区別している。例えば、「家政術」、「取財術」、「蓄財術」など。「家政術」のばあいは、「イエ」を取りしきる策であって、「イエ」の外の状態を問題にしない。「取財術」は商業であるが、「財」の形成過程を問題にしない。「蓄財術」はいわば、「カネ」の取り扱いに関するもので、「富」を「カネ」と決め込んで、それだけを追求する。これらの「術」はすべて、綜括としての「学」で体系づけられなければならない、そこに成立するのが「倫理学」であり、「政治学」なのだが、これらが統一されて存在するのが「第一の哲学」である。以上がアリストテレスの展開するところであるが、詳しくは私がこれに関して研究したことがあるのでそれを参照されたい（阿部弘『労働と所有』〔2〕

哲学と経済学（阿部）

第2部・第1章・第2節・2「アリストテレスの思想における人間と労働」。

2 哲学体系と経済学

(1) アダム・スミス：「法学」論：「ポリス」

スミスの『法学講義』〔24〕第2部「ポリス」の内容（目次）は次の通りである：

第1篇：清潔と安寧

第2篇：低廉または豊富

第1節：人類の自然的慾望について

第2節：すべての技術は人類の自然的慾望に役立つということ

第3節：富裕は分業から起るとということ

第4節：分業はいかにして生産物を増加させるか

第5節：分業を発生させるものは何か

第6節：分業は商業の大きさに比例するに相違ないということ

第7節：いかなる事情が商品の価格を規制するか

第8節：価値の尺度および交換の媒介物としての貨幣について

第9節：国民の富裕は貨幣に存するのではないということ

第10節：鑄貨の輸出禁止について

第11節：貿易差額について

第12節：国内における出費は有害ではあり得ないという意見について

第13節：ロウ氏の計画について

第14節：利子について

第15節：為替について

第16節：富裕の進歩のおそい諸原因について

第17節：風習に対する商業の影響について

この第2部「ポリス」（「治政について」）の位置は、第1部：正義について；第2部：ポリス；第3部：国家収入について；第4部：軍備について；第5部：国際法について の全5部の中に占めるものである（以上、〔24〕〈目次〉参照）。

なお、参考のために『諸国民の富』〔25〕の構成を示す：

第1編：労働の生産諸力における改善の諸原因について、また、その生産物が人民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について

第2編：資財の性質、蓄積および用途について

第3編：さまざまな国民における富裕の進歩の差異について

第4編：政治経済学の諸体系について

第5編：主権者または国家の収入について

『法学講義』中の「経済学」と『諸国民の富』それ自体との比較は、第一に、

前者が「法学」であるのに対して、後者は何か、という点があるが、第二に、前者の「経済学」は流通を主としているのに対して、後者が「生産」を織り込んできていること、第三に、「法学」はまさにそれに応わしく、第3部以下は、国家機構をどうやって維持するかという点に力点があるのに対して、「経済学」とされる後者（『諸国民の富』）の第5編の国家論はまさに、経済システムとの関係での上部構造論になっている。これは、「生産」論的視角からの展開によるものであろう。

(2) スミスの「道德哲学」と「経済学」

スミスが自ら出版した著作は『道德感情論』〔23〕と『諸国民の富』〔25〕である。前者が1759年、後者が1776年であり、その間に17年間の隔りがある。この間、デュゴールド・ステュアートは、恐らくスミスのグラスゴー大学での学生のノート類を参考にしているとは思われるが、主として「道德哲学」のテーマからしか『諸国民の富』をみていない。それはステュアート自身が次のように述べているからである（『アダム・スミスの生涯と著作』〔22〕）。スミスが「遺言」によって、講義用ノートを破棄したこと（〔22〕 p.274；10ページ）、その為に「一から十までグラスゴーにおける道德哲学の氏〔スミス〕の最初の講座に出席した学生たちの回想に依っている……。これは40年の距離をおけば、非常に正確とは想定されえない一回想である」（〔22〕 p.321；77ページ）と。スミスの「道德哲学」と「経済学」の間を埋める「法学」についての講義は1762/3、1766年の二回に渡りなされた。この講義は「ノート」の形で1766年の分が、1896年にエドウィン・キャナンの手により発刊された。実にその間100年経っていたのである。なお、1762/3年の「ノート」はグラスゴー大学版の『アダム・スミスの著作と書簡集』（1976～1983）第4巻（1978年刊）に収められた（〔24〕参照）。

(3) スミス：『諸国民の富』の成立過程

デュゴールド・ステュアートが、スミスの「法学講義」の存在を知らずに次の様に述べている点は種々議論されている点である。つまり、ステュアートはスミスが1764年にフランス旅行をし、1766年末ごろ帰国した後、ほとんど隠退生活をしていて、「ついに（1776年初頭）スミス氏は『諸国民の富の性質および諸原因に関する研究』の公刊によって、氏の長い隠遁生活の理由を世間に明らかにした」ことに対して（『アダム・スミスの生涯と著作』〔22〕 p.308；59ページ）これを、フランス旅行中のフィジオクラート、特にケネーとの出会い、および、スミスが『道德感情論』〔23〕刊行以前（1759年以前）から実施していた「政治論講義」を『諸国民の富』〔25〕として構成する時間に使ったのだと言う問題である（ステュアート〔22〕 pp.301～304/320；49～54/76ページ参照）。

これに対しては、「政治論講義」を下敷にするのは、スミスの「道德哲学」から「経済学」を組み建てようとするステュアートの無理がある、という点では一

応の評価がでていいる（高島善哉：『アダム・スミス グラスゴウ大学講義』解説〔28〕参照）。

しかし、次のように述べるのは今後の検討課題である：福鎌忠如：『『ステュアート アダム・スミスの生涯と著作』訳者解説・註〕〔35〕での所論：

『『道徳情操論』と『国富論』の関係は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』と『政治論』の関係に酷似、前著末尾に予告された後著が未完に終わった点まで類似している。もちろん、スミスがアリストテレスの先例に倣ったわけではなく、著作も内容的には性質を異にしている。』（〔35〕107ページ）

(4) スコットランド「常識哲学」

「経済学」が「法学」から自立する、ということは、何よりも、「法」体系が、「経済」を土台として、したがって上部構造として構築されることを意味する。したがって、「経済学」が「法学」の一部たることは、社会システムの説明を「法」という現象的なものによって説明することになる。アダム・スミスが体系として有していた「道徳哲学」は彼の創造によるものではなく、彼も一学生とし講義を聴講したフランシス・ハチソンの体系によるものであった。そしてそれは無理からぬもので、「法」は「自然法」体系であった。「ハチソンは第一に倫理学について講義し、つぎに自然法学とよばれるべきものについて講義し、第三に国家行政について講義した。このあとの二つの部分のいたるところに、かなり多くの経済学説が散在しているのである」（『諸国民の富』〔25〕キャナンの解説p. xxxvi；36ページ）。スミスの「道徳哲学」の講義がまったくこのハチソン流なので、「旧師〔ハチソン〕の講義の筆記を読みとおし、経済学上の諸論題をひとまとめにし、これをエディンバラからもってきた講義の序論とそれにつづくものにした、という憶測をたくましくしたい気がしきりにする」とキャナンが述べるほどであった（〔25〕p. xli；44ページ）。

この体系を打ち破るのは前述したように（注(1)参照）「生産」、したがって生産力体系の導入であった。高島善哉は『グラスゴウ大学講義』〔24〕「解説」で、この「道徳哲学」の体系（「法学講義」もこの中に入る）と「経済学」との関係について「抽象的自然法と歴史的客観性、生産論と欲望論の対立が、国富論と講義〔「法学講義」〕の対立であるならば」として、フランスのフィジオクラートの影響を問題にするハズバハの論を評価した上で、「しかしながら、我々はこれに対して、講義と国富論をこのやうな対立関係においてではなく、経験論的自然法と生産力の体系との形成過程として理解することができぬであろうか、といふ疑問を提示しておきたい」と述べる（〔28〕22～23ページ）。

(5) ステュアートの「経済学」に対する一つの評価

福鎌忠恕はステュアートの「経済学」を概観して次のように述べる：「ステュアートにとって「経済学」は「道徳哲学」の一部分である。この学問は「正義の

諸原理」と「便宜の諸原理」の「合致」を目的としており、「正しい経済学観と人類の知性的および道徳的向上の間には関係」が存しているからである。」……また「……ステュアートにとって「経済学」とはあくまで「政治学」と切離しえない学問であり、一国民の物質的・精神的な幸福と向上を眼目とし、延いては全人類に「よく生きる」——アリストテレス的に表現して——ことを可能ならしめる広い意味での「政治学」、さらに広くは「道徳哲学」の一分野であった」（『デュゴールド・ステュアート アダム・スミスの生涯と著作』〔22〕「訳者解説」〔35〕346, 348ページ）。

⑥ 大学での「経済学」講座の設置

福鎌忠恕はステュアートが「経済学」の講座を設置したことについて、その間の事情について次のように述べている：

「1788年——翌89年に亘りパリ旅行。革命直前および直後のフランス政情を実見。

1792年——『人間精神の哲学綱要・第一巻』“Elements of the Philosophy of the Human Mind, Vol. I, 1792” 公刊。フランスの「^{エコノミスト}経済学者たち」を称揚したと非難さる。

1793年——『法学博士アダム・スミスの生涯と著作の記述』……をエディンバラ王立協会で講演。……『道徳哲学概説』……刊行。

1796年——〔略〕

1800年——この年より8学年次に亘り「固有経済学講義」‘Lecture of Political Economy proper’を開講。当時のヨーロッパで唯一の経済学講座。イギリス各地方、ヨーロッパ諸国より学生集まる。」

『デュゴールド・ステュアートアダム・スミスの生涯と著作』〔22〕訳者解説〔35〕339～340ページ）。

⑦ 「イデオログ」についての通説

カール・マンハイム：『イデオロギーとユートピア』〔43〕は「イデオログ」を規定して次のように述べている：「イデオログと呼ばれたのは、……コンディヤックを継承する中で形而上学を排斥し、そして、精神科学を人類学的・心理学的に基礎づけようとした、フランスでの哲学学派の学徒のことである」（〔43〕SS. 25-26；40ページ）。

⑧ 「イデオログ」（ケネディの論）

エメット・ケネディは「イデオログ」について、フランス革命時、特に「恐怖政治」のもとでのフランス社会の混乱した状態に対する政策集団として位置づけている。「恐怖政治の「野蛮な無政府状態」に対する治療法は哲学と教育の実施であった。取りあげられたのは漠然とした啓蒙期“哲学”ではなくて、或る一つの名称——コンディヤックの感覚と観念の分析——を冠した、厳密な規律であった」。この「哲学と教育」のための主要な「道具は、感覚主義者のとった分析

手法で、すべての観念をエレメントに分解してしまい、それを再び複合観念またはその体系に作り変えてしまうやり方であった」。ケネディはこの「哲学と教育」を作りあげていく作業に携わった中心機関として「中央学校」を挙げ、その最初の部門としては自然科学が当てられたが、「最も意味のあったのは、新しい道徳科学と政治科学の部門の創設であった。こうして、1789年会が描いていた、啓蒙期の新しい科学が初めて制度化された」。この担い手が「イデオログ」であったと、ケネディは言う（『革命期の或る哲学者』〔16〕 pp. 40～41）。

(9) 「イデオロギー」の語源

ビーリッヒは次のように言う：「『イデオロギー』はその起源からして、革命を実践するなかで、心理学の研究と結びついていた。この言葉はフランスの哲学者の或るグループが最初に用いた。彼らは1789年の革命に参加し、その後、合理的な基盤を有った心理学の原理に基いて革命後の社会を再建しようとしたのである。この言葉の創始に関する権利はアントワヌ・デステュット・ド・トラシーがもっている。彼がこの言葉それ自体に何らかの特殊な重要性を与えたというのではなくて、観念の科学的研究の意味を、彼がこの言葉で表現しようとしたということである」（『イデオロギーと社会心理学』〔34〕 p. 7）。

また次のような規定：「『イデオロギー』および『イデオロジスト』 (*idéologiste*) という言葉は1796年にデステュット・ド・トラシーが「観念の科学」を表現するために造りだした。彼はこの概念を、合理的心理学とは区別して、生理学の構成部分として作りあげようとした。カバニスやコンディヤックの仕事の継続として「イデオロギーは現実的基礎を与えられている」（デステュット・ド・トラシー、『論理学の原理、あるいは人間の知能上での相対的行為の集成』パリ、1817年、xviおよび97ページ）」（ジョルジュ・ラビカ／ジェラルド・パンズザン：『マルクス主義の批判的辞典』〔46〕）

(10) 『イデオロギー論』第5巻とその未完成

『イデオロギー論』は第5巻までで打切られた。これは通常、著者がやり残して死んでしまった、という種類のものではない。ド・トラシー（1754～1836）はこの第5巻を第4巻と合本にして1815年に刊行した。しかし、この第5巻（「わたしたちの感覚および感情、あるいは道徳」）は、I. 予備的観念、II. 愛について、で構成されているが、後者は途中で、しかも文章の途中で切れている。そして、ド・トラシーはこの事に関して、この問題（途切れたこと、それを含めた全体構成）の判断を読者の手に委ねている（〔29〕第5巻「最終ノート」）。

さて、この問題はスタンダールに引き継がれたと言われている。スタンダールは、ド・トラシーなど、イデオログの中央学校の学生であった。彼自身『恋愛論』の中で自分の書が「イデオロギー」と関係あることを述べている（〔19〕19～21ページ）。しかし、だからといって、スタンダールとこの『イデオロギー論』、

特に第5巻「Ⅱ. 愛について」との関係を探ろうとしても無意味であろう。ルネ・ジラルは、しかし、少し気にして次のように述べている：

「文学史家たちはわれわれに、スタンダールの大部分の観念は哲学者ないしイデオログたちから受け継いだものだと言っている。

それならばかくも輝かしいと人の言うこの小説家は、彼のものである思想は一つも持たなかったということになる。そうして、死にいたるまで他人の思想に忠実であったということになるであろう。……

人々は、作品のすべての扉をひらくであろう偉大な鍵を夢みている。……けっして人は、カバニスとかデステュット・ド・トラシーの助けを借りて『赤と黒』の一ページをも解明することはないであろう。体質理論から借用した明日なきいくつかの借り物を除けば、成年期の小説の中にはもはや青年期の理論の痕跡は見当らない。スタンダールは、先行した時代の思想的巨人たちにたいして自己の独立をかちとった、その時代の数少ない思想家の一人である。……」（『欲望の現象学』〔18〕126ページ）

(11) 「イデオロギー」の起源

ド・トラシーがどのような意味で「イデオロギー」という概念を用いたのか、グイエは、ド・トラシーの1798年の論文「思考能力に関する覚え書き」（“Mémoire sur la faculté de penser”）を引用して説明するが、それによれば、ド・トラシーは次のように言う：

「「イデオロギー」は「観念の科学」の直訳……である。このことは、さらに「イデー」という語のギリシア的語源を斟酌すれば更に精確性が得られる。というのは、*εἶδω* という動詞は、「私は見る、私は見ることによって知覚する」、そして、同じことだが、「私は理解する、私は知る」ということを言わんとするものだからである。名詞形の *εἶδος*、あるいは *εἰδέα*、これは一般に「画面、イメージ」と訳されるが、これは、〔上述したことから〕実際に「見るという、感覚によって知覚する」ということを、分析・意味するのである」

ここから、ド・トラシーは“*idéologie*”という概念を抜き出したのである。（グイエ：「歴史的序説」〔14〕p.12、およびド・トラシー：『イデオロギー論』〔29〕第1巻、p.37、参照）

(12) *idola* と *εἶδος*

古代ギリシア語では *εἶδος* は、「見た結果」、「形態」（「形相」）である。この言葉から、*εἰδωλον* が派生する。これはラテン語の *idolm* となる。語義は「イメージ」である。これが *idola* となったのである（LD〔49〕参照）。

(13) シェイエスの「市民」

シェイエスは『第三身分とは何か』〔17〕の中で「労働」を「個別労働」・「公的労働」に分けている。「個別労働」（*les travaux particuliers*）は4つに分類され

る：

1. 農耕；2. 工業；3. 商業；4. その他

このうち、前三者を“*citoyens*”として〈4〉と区別している（なお、日本版ではこれを「勤労市民」としている）。また、〈4. その他〉は、「学者・自由業・家事等」である。

シェイエスは、「個別労働」の〈4〉および、「公務」を含めて、社会の「労働」は“*citoyens*”によって負担されている、と述べている。

（〔17〕 p. 5；23～4 ページ）

(14) “*CITOYEN*”

ヘーゲルは“*Bürger*”を問題にするときにこれは一体，“*citoyen*”なのか“*bourgeois*”なのかを問うているが、その基準に「愛国心」を持ってきているのは、*Bürger* が後に“*Staatsbürger*”として把握されていく点で興味あることである（ヘーゲル：「下級クラス用の権利、義務および宗教学講義」〔38〕, S. 266 参照）。

(15) *citoyen* の語源

“*citoyen*”の語源はラテン語の“*civis*”であるが、これは古代ギリシア語の“*κώμη*”に由来する。“*κώμη*”は邑を意味し、“*πόλις*”とは区別される（LD〔49〕, GEL〔48〕参照）。

(16) *civis* と「権利」

“*civis*”は古代ギリシア語の“*κώμη*”の他に“*κεῖμαι*”にも由来し、この“*κεῖμαι*”は元来、「置く」とか「横たわる」というイギリスでの“*lie*”の語義。そして、“*κεῖμαι*”にも、“to be placed in position”, “of laws”という語義がつけ加わり（GEL〔48〕）、これが、ラテン語でも「政治的権利」を意味するようになったものである。特に“*civitas*”には「都市の自由の権利」を意味する語義が付加された（LD〔48〕）。そこで、興味あることに、J. B. セイは、「*πόλις*, *civitas*, *la cité*, *la société*, は同義である」と述べるのである（『実践経済学体系』〔27〕 p. 1）。

(17) ド・トラシーと貴族身分

ビーリッヒは『イデオロギーと社会心理学』〔34〕で次のように述べている：

合理的な社会を形成するためには不合理な権威を投げ棄てることが必要であった。イデオロギー哲学は君主や聖職者の持っていた権力との対抗の中で発展した。ド・トラシー自身は1789年以前には將軍の一員であった。しかし、彼は貴族家族の一員としての自己の個人的利害に対立してまでも君主および貴族の権力を弱めようと積極的に行動した」

（〔34〕 pp. 9～10）

(18) ド・トラシーによる人間の精神的機能論

上山春平は「哲学思想」〔7〕において、ド・トラシーの精神的機能論について

て次のように述べる：

「……精神的機能について……トラシーは感受性、記憶、判断、意志という四つの機能を基本的なものとみなし、他の機能をこれらの複合物として説明する。四つの基本的機能の想定はつぎの通り。

- (一) 感受性……感覚とよばれる印象を受け入れる機能。
- (二) 記憶……感受性の二次的な部分。かつて経験された印象が回想されることによって生じる。
- (三) 判断……さまざまな知覚のあいだの関係を感覚する機能。
- (四) 意志……欲求を感覚する機能。

他の機能にかんしては、たとえば、注意は意志の一つの結果、比較は二つの観念の感覚とそれらの関係の判断の結合、反省は一つの判断をなしとげるための感受性や記憶を用いる状態、等として規定される。」

(〔7〕264ページ)

3 経済学

(1) ド・トラシーの経済学の位置づけ

デステュット・ド・トラシーという経済学者は？ となると、首をかしげたくなるほど、この「経済学者」は忘れ去られている。しかし、カール・マルクスの『資本論』には、ここかしこ名前の散見する人物だし、特に第2巻〔42〕では第3篇・第20章「単純再生産」に一節を設け「デステュット・ド・トラシーの再生産論」としている位である。マルクスは「パリ・ノート」の中でド・トラシーの『イデオロギー論』〔29〕第4巻・第5巻を刻明に読んだ覚え書を作成している(〔40〕SS. 489~492)。

河野健二：「経済思想」〔12〕は「経済学者」としてのド・トラシーを示してくれる数少ない研究の一つである。この研究は、フランス革命期のフランスの経済思想に関するものだが、ド・トラシーを「ブルジョア経済学」のフランスでの代表者の一人としている。曰く：

「……経済思想の歴史のしめくりとして、テルミドール以後の注目すべき理論家デステュット・ド・トラシーについて述べておこう。彼こそは、フランス革命の激動期を通じて、ケネーにかわる新しい経済学、すなわちフランス・ブルジョア経済学の代表者としてJ=B・セイとともにならび称さるべき仕事を残した人物であると考えられるからである」

(〔12〕228ページ)

(2) フランス革命とブルジョア

「フランス革命」は基本的に「シトワイヤン」次元である。ただ、「シトワイヤン」の分解は進んでいたと思われる。しかし、だからと言って、「ブルジョア」

哲学と経済学（阿部）

が「いた」か「いなかった」かを議論しても、それ自体としては不毛である。何も無理して「サン＝キュロット」を「プロレタリアート」として規定しなければならない事情は全く無いのである。ロムは、「フランス革命」では、「階級」問題を扱うべきでないと言ったり、階級問題を考えるに際しては「マルクス主義者」の見解を除外すべきだ、というが（『権力の座について大ブルジョアジー』〔50〕第1章・第1節参照）、そもそも「シトワイヤン」の分解過程と「ブルジョア」の形成を、資本主義の確立した時点での支配階級としての「ブルジョアジー」の問題と同一視することはできない。「ブルジョア」は「シトワイヤン」の否定なのである。この問題は、したがって「シトワイヤン」なるものの世界がどの様にして内部的に崩壊して行くのか、が明らかにされることが重要であると同時に、それは「ブルジョア」の形成として把握すべきで、その政治・社会的エポックが「フランス革命」であったと言える。「ブルジョア」概念はフランス革命を媒介にして、ドイツ思想界に質的な影響をもたらす。このことについてはリーデル：「市民・国家市民・市民権」〔47〕を参照されたい。

〔補 註〕

この研究は1986年度、駒沢大学特別研究助成（個人）の対象となった「経済学の形成過程」というテーマでの研究の一環である。

資料については、J. B. セイなど、19世紀初期の文献に関しては、一橋大学図書館、早稲田大学図書館のお世話になった。特に、一橋大学の松石勝彦氏には文献その他の点で御世話になった。この場を借りて御礼申しあげる。

なお、私のこの論文が大変遅れたにも拘らず、『論集』掲載を快よく了承していただいた、駒沢大学経済学部編集委員会に御礼申しあげる。

文 献

（アイウエオ順）

- 〔1〕 L'Académie de 1798: *Les Mots de la Révolution*, Préface de Isabelle Albaret, Éditions Ledrappier, Paris 1987.
- 〔2〕 阿部 弘：『労働と所有一経済学の出発一』八千代出版、東京、1983.
- 〔3〕 アリストテレス：『形而上学』、出 隆（訳）『アリストテレス全集』岩波書店、東京、1986〔以下『全集』〕第12巻.
- 〔4〕 アリストテレス：『靈魂論』、『全集』第6巻.
- 〔5〕 アリストテレス：『ニコマコス倫理学』、『全集』第13巻.
- 〔6〕 アリストテレス：『政治学』、『全集』第15巻.
- 〔7〕 上山春平：「哲学思想……イデオログの思想と行動……」、桑原武夫（編）『フランス革命の研究』……京都大学人文科学研究所報告……、岩波書店、東京、

1959, 第5章。

- [8] Welch, Cheryl B.: *Liberty and Utility... The French Idéologues and the Transformation of Liberalism...*, Columbia University Press, New York 1984.
- [9] エルヴェシウス, クロード, A., 根岸国孝 (訳): 『人間論』〔1772〕世界古典文庫, 日本評論社, 東京。
- [10] オペール, L.: 「ギターール『日記』〔13〕“はしがき”」
- [11] Cabanis, Pierre J.G.: *Rapports du Physique et du Moral de L'Homme* [1802] [Reprint: Réimpression de l'édition de Paris, 1844. Slatkine Reprints, Genève, 1980.] [Eng. tr. *On the Relations between the Physical and Moral Aspects of Man*. Ed., by George Mora, with Introductions by Sergio Moravia and George Mora. Tr., by Margaret D. Saidi, The Johns Hopkins University Press. Baltimore & London. 1981.]
- [12] 河野健二: 「経済思想」, 桑原武夫 (編): 『フランス革命の研究』……京都大学人文科学研究所報告……, 岩波書店, 東京, 1959, 第4章。
- [13] ギターール, セレスタン: 『フランス革命下の一市民の日記』〔『日記』と略記〕, レイモン・オペール (編) [1974], 河盛好蔵 (監訳), 中央公論社, 東京, 1980.
- [14] Gouhier, Henri: “Introduction Historique” Destutt de Tracy: *Éléments d'Idéologie* [29] [Gouhier 版]
- [15] 久保田明光: 「ドステュット・ド・トラシィの『観念学要論』にあらわれたる価値理論……リカアドゥのドステュット・ド・トラシィ理解に関連して……」『正統派経済学説研究』……〔経済理論第一冊〕, 泉文堂, 東京, 1949.
- [16] Kennedy, Emmet: *A Philosophe in the Age of Revolution, Destutt de Tracy and the Origins of “Ideology”*. The American Philosophical Society, Philadelphia, 1978.
- [17] Sieyès, Emmanuel Joseph, abbé: *Qu'est-ce que le Tiers-État?* [1789] Seconde Édition, corrigée. *Plan de Division du Royaume, et Règlement pour Son Organisation*. Présente par M. le Comte de Mirabeau a l'Assemblée Nationale. Imprimé par ordre de l'Assemblée Nationale, 1789, 所収。〔大岩誠 (訳): 『第三階級とは何か／他二篇』岩波文庫, 1950〕
- [18] ジラール, ルネ: 『欲望の現象学——ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実——』〔1961〕古田幸男 (訳), 法政大学出版局, 東京, 1971.
- [19] スタンダール: 『恋愛論』〔1822〕, 大岡昇平 (訳), 新潮文庫
- [20] Stewart, Dugald: *Elements of the Philosophy of the Human Mind*. Vol. I. London: Printed for A. Strahan, and T. Cadell in the Strand; and W. Creech, Edinburgh. M DCC XCII [1792]

Vol. II. Edinburgh. 1814.

Vol. III. London: John Murray. 1827.

- [21] Stewart, Dugald: *Lectures on Political Economy*. Now First Published. To which is Prefixed, Part Third of the Outlines of Moral Philosophy. Edited by William Hamilton. [1855] [Reprint: Augustus M. Kelley Publishers. New York. 1968]
- [22] Stewart, Dugald: *Account of the Life and Writings of Adam Smith* [1811] The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith. Commissioned by the University of Glasgow to celebrate the bicentenary of *The Wealth of Nations*. [以下GL] Vol. III. Clarendon Press, Oxford. 1980. [福鎌忠恕（訳）デュゴールド・ステュアート：『アダム・スミスの生涯と著作』お茶の水書房，東京，1984.]
- [23] Smith, Adam: *The Theory of Moral Sentiments*. [1759] [Edited by D. D. Raphael/A. L. Macfie. GL Vol. I., 1976] [米林富男（訳）：『道德情操論』上・下. 日光書院，東京. 1948]
- [24] Smith, Adam: *Lectures on Jurisprudence*. [1762-3/1766] [Edited by R. L. Meek/D. D. Raphael/P. G. Stein. GL. Vol. IV., 1978] [高島善哉/水田洋（訳）：『アダム・スミス グラスゴウ大学講義』，日本評論社，東京. 1947]
- [25] Smith, Adam: *An Inquiry into the Nature and the Wealth of Nations*. [1776] [Edited, with an Introduction, Notes, Marginal Summary and an enlarged Index by Edwin Cannan. [1904] 6th ed. Methuen & Co. Ltd., London. 1950] [大内兵衛/松川七都（訳）：『諸国民の富』，岩波書店，東京. 1969]
- [26] Say, Jean Baptiste: *Traité d'Économie Politique, ou Simple Exposition de la Manière dont se Forment, se Distribuent, et se Consomment les Richesses*. [1803] Troisième Édition. A Laquelle Se Trouve joint un Épitome de Principes Fondamentaux de l'Économie Politique. Tome 1/2. Deterville Libraire, Paris. M. DCCC. XVII. [増井幸雄（訳）：『ジャン・バティスト・セイ 経済学』上・下〈経済学古典叢書〉岩波書店，東京. 1926 [大正15]/1929 [昭和4]. この訳書は1841年版によっている.]
- [27] Say, Jean Baptiste: *Cours Complet d'Économie Politique Pratique. Ouvrage Destiné a Mettre sous les Yeux des Hommes d'État, des Propriétaires Fonciers et des Capitalistes, des Savants, des Agriculteurs, des Manufacturiers, des Négociants, et en Général de tous les Citoyens, L'Économie des Sociétés*. [1828/9] [Reprint of 3^{me} éd., par Horace Say, 1851: Osnabrück, Otto Zeller, 1966.]

[28] 高島善哉：『アダム・スミス グラスゴウ大学講義』〔24〕“訳者解説”]

[29] Destutt de Tracy, Antoine-Louis-Claude: *Éléments d'Idéologie*. I-V
〔1801-1815〕

(1) : *Projet d'Éléments d'Idéologie* A l'Usage des Ecoles Centrales de la
Republique Francaise. 〔1801〕〔*Éléments d' Idéologie*: I〕

(2) : *Éléments d'Idéologie. Seconde Partie. Grammaire*. 〔1803〕

(3) : *Éléments d'Idéologie. Troisième Partie. Logique*. 〔1805〕

(4) : *Éléments d'Idéologie. IV^e et V^e Parties. Traité de la Volonté et de
Ses Effets*. 〔1815〕

以上：〔Faksimilie-Neudruck der Ausgabe, Paris 1801-1815〕. Friedrich
Frommann Verlag. Günther Holzboog GmbH & Co., Stuttgart-Bad Cann-
statt, 1977

〈(1)〉：Henri Gouhier (éd.) 〔1817年版の復刻〕 Librairie Philosophique J.
Vrin, Paris. 1970.

〈(4)〉：アメリカ版： *A Treatise on Political Economy; to which is prefixed
a Supplement to a Preceding Work on the Understanding or Elements
of Ideology; with an Analytical Table, and an Introduction on the Faculty
of the Will*. Translated from the unpublished French Original. 〔by
Thomas Jefferson〕 〔1817〕.

〔Reprint: Auqustus M. Kelley. Publishers. 1970〕

[30] Destutt de Tracy, Antoine-Louis-Claude: *Commntaire sur L'Esprit
des Lois de Montesquieu. Suivi d'Observations Inédites de Condorcet sur
le Vingt-Neuvième Livre du même Ouvrage et d'un Mémoire sur cette
Question: Quels sont les Moyens de Fonder la Morale d'un Peuple? Écrit
et Publié par l'Auteur du Commentaire de l'Esprit des Lois en 1789*(AN
VI). 〔1819〕

〔Slatkine Reprints. Genève. 1970.〕

アメリカ版： *A Commentary and Review of Montesquieu's Spirit of Laws*.
Prepared for Press from the Original Manuscript, in the Hands of the
Publisher. To which are Annexed, Observations on the Thirty-First
Book, by the Late M. Condorcet: And Two Letters of Helvetius, on
the Merits of the Same Work. 〔1811〕〔By Thomas Jefferson〕〔Reprint:
Burt Franklin, New York. 1969〕

[31] 鳴沢宏英：「ドル全面安……市場の反逆が始まった」『エコノミスト』1988.
1・5号

[32] 根岸国孝：「エルヴェシウスの生涯」, エルヴェシウス『人間論』〔9〕上, 所

取。

- 〔33〕 Hutchison, T.: *The Politics and Philosophy of Economics... Marxians, Keynesians and Austrians...*, Basil Blackwell, Oxford, 1981.
- 〔34〕 Billig, Michael: *Ideology and Social Psychology... Extremism, Moderation and Contradiction*, Basil Blackwell, Oxford, 1982.
- 〔35〕 福鎌忠恕:「デューゴールド・ステュアート:『アダム・スミスの生涯と著作』〔22〕“訳者解説”及び“訳者註”」
- 〔36〕 Brunot, Ferdinand: *Histoire de la Langue Française...des Origines à 1937 I~XIII*, Librairie Armand Colin, Paris, 1966-68.
- 〔37〕 ベイコン, フランシス:『ノヴム・オルガヌム(新機関)』〔1620〕桂 寿一(訳), 岩波文庫, 東京.
- 〔38〕 Hegel, Georg Wilhelm Friedrich: “Rechts-, Pflichten- und Religionslehre für die Unterklasse”〔1810 ff.〕*G. W. F. Hegel. Werke in Zwanzig Bänden*. Bd. 4. “Nürnberger Schriften (1808-1817)”, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1970
- 〔39〕 増井幸雄:「ジャン・バティスト・セイの生涯」, 増井幸雄(訳)『ジャン・バティスト・セイ 経済学』〔26〕所収.
- 〔40〕 Marx, Karl: “Historisch-ökonomische Studien” (Pariser Hefte)〔1843~45〕, *MEGA IV/2*
- 〔41〕 Marx, Karl: *Das Kapital... Kritik der Politischen Oekonomie...*, *Erster Band*
Buch I: Der Produktionsprozess des Kapitals.
1er Aufl.〔1867〕Reprint: 青木書店, 東京. 1959.
2te Aufl.〔1872〕Reprint: Far Eastern Book-Sellers, Publishers, Tokyo. 1969.
フランス版: 2^{me} éd.〔1887〕: *Le Capital*. Traduction de M. J. Roy, Entièrement Revisée par l'Auteur. Librairie du Progrès, Paris.
4-te Aufl.〔1890〕, *MEW* Bd. 23.
日本版: マルクス=エンゲルス全集刊行委員会(訳), 大月書店, 東京. 1968.
- 〔42〕 Marx, Karl: *Das Kapital... Kritik der politischen Oekonomie...*, *Zweiter Band*
Buch II: Der Cirkulationsprozess des Kapitals〔1885〕, *MEW* Bd. 24
日本版: マルクス=エンゲルス全集刊行委員会(訳), 大月書店, 東京.
- 〔43〕 Mannheim, Karl: *Ideologie und Utopie*〔1929〕
2te Aufl.: Schriften zur Philosophie und Soziologie. Begründet von Max Scheler. Herausgegeben von Karl Mannheim. Band III. Verlag von

- Friedrich Cohen, Bonn, 1930.
- [44] Mishan, Ezra J. : *Introduction to Normative Economics*. Oxford Univ. Press, New York/Oxford, 1981.
- [45] Mill, John S. : *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*. [1844] [Reprint: *Early Essays by John Stuart Mill*, Selected from the Original Sources by J. W. M. Gibbs, George Bell and Sons, London, 1897.] [末永茂喜 (訳) : 『経済学試論集』, 岩波文庫, 東京, 1936.]
- [46] Labica (éd.) : *Dictionnaire Critique du Marxisme*. Directeur de la Publication Georges Labica. Presses Universitaires de France, 1982. [*Kritisches Wörterbuch des Marxismus*. Herausgegeben von Georges Labica und Gérard Bensussan. Herausgeber der deutschen Fassung Wolfgang Fritz Haug. Argument-Verlag GmbH Berlin/West, 1985]
- [47] Riedel, Manfred: "Bürger, Staatsbürger, Bürgertum" *Geschichtliche Grundbegriffe... Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*. Herausgegeben von Otto Brunner, Werner Conze, Reinhart Koselleck. Bd. 1. Ernst Klett Verlag Stuttgart. [1972]/1974. SS. 672-725.
- [48] Liddell, H. G. / Scott, R. (ed.) : *A Greek-English Lexicon*. Clarendon Press, Oxford, 1968. [GEL]
- [49] Lewis, Charles T. / Short, Charles ed. : *A Latin Dictionary*, founded on Andrew's Edition of Freund's Latin Dictionary. Clarendon Press, Oxford, 1879 [LD]
- [50] ロム, ジャン : 『権力の座について大ブルジョアジー……19世紀フランス社会試論』 [1960], 木崎喜代治 (訳), 岩波書店, 東京, 1971. [GEL…[48]/LD…[49]]